

56 絵痴について

真鍋友範

2023

聞きなれない言葉、【絵痴】。エッチではない。えち。当然、これは小生の【造語】なのだ。その意味とは、音痴の対語だ。絵画音痴だから、絵痴（えち）。

音痴は世間に認識されている。一定数の人は歌うと音程がずれていても。当人は気づかない。しかし周囲は気づくから、当然本人も音痴であると自覚することになる。

一方で絵痴は、音痴より始末が悪い。何故なら、音痴よりも圧倒的に多数存在するのに、その事実を自覚している人は極端に少ない。それどころか、堂々と絵は分からない、と宣う人だって存在する。もちろんそれには謙遜もあるが、謙遜では済まない場面もある。

特に、絵画について語ることを職業としている人たちは、絵が読めない、つまり【絵痴】であることなど絶対にあってはならないだ。

現実には、日本では、この【絵痴】である人々が美術評論家や、有名大学の美術史の教授、助教授などの肩書きで、事実と反する内容の著作を社会に広め続けている。この事実が目覚めることのない一般の美術ファンの鑑賞眼も、また怪しいのだ。

結果として誤りに溢れた美術解釈は是正されることがない。

では、具体的な話をしよう。

まず、小生は一応美術に関して全くの素人ではない。高校時代にはデッサン修行にも励み、大学では彫刻を学んだ。その後、とある県の高等学校の美術科教諭として定年まで勤務した後、再任用教諭としても5年間勤務し、その後は私立高等学校の派遣美術教員として3年間勤務し現在に至っている。

美術教諭として働く中で、時代は平成になった頃、新しい構想の美術専門教育の施す場所を新設する場面に遭遇し、周囲の支援もあり、当時新設した新設芸術科（まだ美術科ではなかった）の専任教諭として、仲間の教諭と共に構想を練り、美術専門教育システムを作り始めた。

当時は、とにかく教育活動が楽しかった時期だった。なぜかと言うと、美術に意欲ある高校生を相手に教えることは、美術教師としてとても楽しかったから

だ。生活の全ての時間が教育構想に充てられた時間だった。

どうすれば、【本校に入学した生徒の美大進学希望を叶えられるか】、が重要課題となったのだった。

その中でも、新しい教育システムの構築は、個人的にも最重要課題だった。

当時は、県に、年度末に他県の学校を訪問できる制度があり、この制度を利用したりしながら、国内有数の美術専門教育を施す芸大進学にも実績のある美術館専門高校を訪問する機会を得た。東京都の芸術総合高校、岐阜県の加納高校、大阪府の市立工芸高校、兵庫県の明石高校、埼玉県の大宮高校など、また別の機会にお邪魔した鹿児島県の松陽高校、広島県の基山高校、宮城県の宮城野高校も素晴らしい設備を持つ各県の文化の顔となる一流高校であった。当時対応していただいた教頭先生や専門学科の主任の先生には、いまでも心底より感謝している。

この経験を生かして、1年時はデッサンに重点を置いた4分野の基礎教育、2年次は専門の2科目選択、3年次は専門1科目選択の【受験対応型美術専門教育のカリキュラム】が出来上がった。

しかも、特徴はそれだけではなかった。夏季休業中の山中湖での往復バスを使った絵画実習、多摩美術大学オープンキャンパスへの学科全員での訪問や武蔵野美術大学オープンキャンパスへの学科全員での訪問などを実施した。女子美術大学についても、初期の頃は特にオープンキャンパス参加でお世話になった。これらの経験は美大進学へのモチベーションを高め、とても効果が上がった行事であった。

教育スタッフの選定では、専任教諭枠を一人分削り、あえて必要専門分野科目の非常勤教諭の獲得に務めた。工芸、グラフィックデザイン、彫刻などの各分野では専門分野に強い教員確保に尽力した。時には臨時任用で現職の芸術家を呼んで講師になっていただき、芸術家、美術家、美術大学教授による講演会も依頼した。

さらには、美術予備校との連携教育も企画した。デッサンコンクールを企画し、その講評会を依頼し、美大の入試科目に基づいた美大模擬試験も構内で実施していただいた。

デッサン実技技能の向上の為、あるいは彫塑実習の為に、美術ヌードモデルの出張を定期的に依頼した。これは首都圏に本校が位置するという特権の故であった。

さらに重要な行事は、2年次に実施した《イタリア姉妹校交流実施に向けた海外研修旅行》であった。

その為に、1年次には、イタリア語を以降交流生徒の必須選択科目とすることで、海外研修が実のある旅行となるよう配慮した。（ただし美術大学の入試科目

にはない。)

このイタリア海外研修は、修学旅行ではない為、実施期間については最長 11 日間を使い、イタリア各都市や美術館・聖堂を巡回し、ルネサンス。バロック美術史にでる有名な建築・絵画・彫刻などを堪能した。

時にはベスパの工場に付属する美術館見学でインダストリアル・デザインの勉強もした。

ミラノでは、《最期の晚餐》を生徒全員が見られるよう、イタリア在住の日本人彫刻家に鑑賞手配を手伝っていただくなど、当時の関係者のご助力に感謝のほかない。

フィレンツェでは、当時依頼していた近畿日本ツーリストの担当者様のおかげで、フィレンツェの語学学校長の紹介を経て、由緒のあるフィレンツェの美術専門高校である国立ポルタ・ローマナ美術専門高校を紹介いただいた。

小生の勤務中の 5 年間、毎年フィレンツェに行き、該当校を訪問させていただき、両校の文化交流の交換授業や交流などを実施し、生徒たちの実施後アンケートでの満足度は毎回 98 パーセントレベルであった。

日本の美術大学が専門分野別に進学する制度である以上、大学生になってからの体験では遅く、高校生の段階で将来への刺激を与えておくことが重要であり、価値あることであり、その価値について当時の保護者各位の美術教育への理解・熱意・期待があったからこそ成就したのだろう。

この教育システム等の効果は数年で現れ、東京芸大へ同時に 4 名の合格者を生んだ年もあった。(その後には五名同時合格の年もあったらしい。)

数年後、サーズ・ウイルスの世界的流行により、交流に中断が危ぶまれた年もあったものの、なんとか周囲の協力を得て乗り越え、交流の後半には、無事国際姉妹校交流の締結書を交換し、その後の両校の国際美術交流への第一段階が完結した。

しかし、ここ数年はコロナウイルスの世界的流行を経験した。2023 年現在交流は中断せず実施できているかは不明だ。

さて、イタリアでは各地のルネサンス・バロック美術ゆかりの美術館、聖堂を見学したのだが、ローマに一箇所毎年のように気にかかる見学地点があった。

それが、ローマのナポーナ広場側にあるサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂のカラヴァッジョ作品《聖マタイの召命》であった。

現地で 5～6 回は直接作品を見たが、当時イタリア人のフィレンツェ市公認公式ガイドの方の説明を聞くと、マタイは【中央のひげ男】であるとの説明であった。

帰国して、書籍を探したところ、とある西洋美術史専門家の書かれた書籍には、マタイは【俯いた若い収税人】だと書かれていた。

しかし、私は納得できない。いくつもの疑問に答える説明はなく、解説が不明瞭なのだ。例えば、イエスは『力なく指差した』とか、あり得ない答えだったのだ。

通常指さす時、意志を込めないで指さす人なんていない。いくら超人のイエスでもあり得ないと感じたのだった。【どう見てもイエスは指差していない。】【イエスは手首から先を、力を込めないで回している。】指差していると感じる人は、本当に絵を真剣に細部まで見ているのだろうか、との疑問が湧いたのだ。

あれから10年経つが、やはり世間の《聖マタイの召命》の講評は、日本国内では、まるで時間が止まっているかのように謎状態のまま。

究極的に小生が気づいたのは、世の中には【絵痴】なる人が多数存在するという結論であった。

特に絵画美術を、実技ではなく、学問として、文章上で認識している人たちは、絵画そのものを直接見て分析する十分な能力があるのだろうか、小生には疑問が生じるのだ。

そして、その典型例が、《聖マタイの召命》への永遠の非合理的な誤謬解釈状態だ。

小生が2013年にネット論文上ではあるが、これを指摘して、累計1万人以上がチェック閲覧しているにも関わらず、また10年もの歳月が流れているにも関わらず、まだ【謎だ】などと、意味不明の戯言が続いている。

もう呆れてしまい、打つ手がない。つまり、【絵痴】なる人は、この世に多数存在するのだ。